

愚か村話の近代

——「解釈する言説」の変遷——

飯倉義之

昔話の一類とされる愚か村話は、しばしば、「愚か村は落人の里である／愚か村話は落武者の自作自演である」という歴史的・伝説的な言説が付加され、通用している。

房総の愚か村話である増間話は、そのような歴史的・伝説的な言説を軸として「山間の増間の者を笑う話」から「落人の伝説を背景とした、知恵者が愚か者を装う話」へと読み換えられ、落人という「房総の歴史を物語る話」という意味づけがなされて通用している。

増間話が積極的に読み換えられていく過程には、地域で活躍した歴史家・郷土史家の活動、特に印刷メディアを通しての活動が大きく寄与している。安房郡の話者たちは、日々の生活の中で彼らの言説を攝取し、取捨選択して一人一人の解釈や見解を育て上げている。

従来の口承文芸研究は、こうした地域の歴史家・郷土史家の活動が「口承」に与えてきた影響について無視、あるいは排除の姿勢をとってきた。だが、実際のフィールドでは、話は「口承」の世界に完結して存在していたのではなかつた。

本稿では、安房郡における増間話の転換と変容を具体的に論じる

ことで、「口承」と「書かれたモノ」とを二項対立で扱う圓式から抜け出して「口承」の現在と向き合う、一つの試みしたい。⁽¹⁾

【事例1・増間と増間島】

富浦のね、大房^{だいふ}にね、先つちょにね、島があつだよ。それは、まあ、俗に言う「増間のバカ」つていうけんさ、増間のバカ面はね、増間から、富浦に島があんだから、ね。「増間ンバカ」つてえより「増間ン利口」、利口もんだよ。富浦におめえ、島があんだから。だからこの三芳、三芳、三芳からね、ズーッと奥へ、別世界のところに増間つちゅうとこがあんだよ。あすから大房のね、先つちょまでね、増間ドン、正月飾り吊りつ来る。「増間ンバカ」つてえげん、増間もん、利口だよ。三芳にいて、大房の一番先つちょに島、増間の島があんだから。いまだにまだ、正月になれば飾り、吊りにくる(笑)。

——増間にはバカがいるの？——

え？

——増間の人は、バカばかりなの？——
え？（笑）バカだって一口にゅつただけんの、バカヅラに頭いいだお。増間にいてて、三芳の先(ちよ)に、別世界のことにいてて、大房の先の島、とつてんだから。

増間話は増間集落、現在の千葉県安房郡三芳村増間をその舞台として話される「愚か村話」である。増間話は増間のある安房郡を中心に、房総半島の主に木更津以南の地域において「増間ンバカの話」「増間ッペーの話」として広く知られていた。

「愚か村話」は、『日本昔話事典』（弘文堂、昭和五十二年）の同項目によれば、「ある村またはある集落の住民の、もの知らずやことば知らずなどから起る愚行を笑う話群を総称していく」術語であると解説されている。同項目の別図「著名な『愚か村話』の分布」には、三十五の日本の「著名な愚か村話」が紹介されており、増間話もその一つとして挙げられている。

冒頭の事例は論者が、増間のある三芳村に隣接する安房郡富浦町で聞き取った、現在の増間話伝承の一例である。話者は増間島とう小岩島の地名の由来を物語る話の中に

「[増間ンバカ] つてえより [増間ン利口]、利口もんだよ。」

「[増間ンバカ] つてえけん、増間もん、利口だよ。」

「バカだつて一口にゅつただけんの、バカヅラに頭いいだお」

と、「増間の人間は愚か者をよそおつた知恵者である」とする主張を織り込んでいる。

【事例2 増間の落人伝承】

——あと、この辺でよく聞く話というと、増間の話も聞いたなんすけれども、あれは聞かれましたか？——

よく聞いたね（不明）。われわれ子供の時分は、それ、増間のバカつちゅうてね、うん。あれ、きっと利口だつたんだよ。

——それは、だましてたんですか、周りの人を？——

だましたんじやなくてねえ、なんか、利口な人がいたんだろうな、やつぱりあすこは。あのねい、シユンタントイタクジョウダンラショウゼズつて、そういうところには、昔はきっと、追われた人とか戦に負けた人は、そういう辺鄙なところに逃げこんだんだよな。だからねえ、そういうところには、系統のいい人間が残っているはずなんだよ。出てくれば、捕まつて、もう、何されるかわかんないから。昔はだつて、戦をすればほんとに殺しつこ、やるんだからさ。なんつたつてこの捕まんない、負ければ、捕まんない、見つかんないところに逃げなくちゃいけないやね。だから増間は「真田」つて姓があるんだよ。それは「真田幸村の一派が逃げ込んだんだろう」つていう言い伝えがあつたのね。昔からよくいつたね、うん。こんなこともあります。よく、話しますけどね、増間の家に「真田」つていう姓が多いんですね。多いらしいですね。何軒くらいあるか、わ

たし知らないけどね、事実あるんだよね、真田⁽³⁾は。

愚か村話にしばしば「愚か村の者は愚かをよそおつた知恵者である」とする言説が付加され、その起源の説明に「愚かをよそおつたのは彼等が落人の身分であり、世を忍ぶ必要があったからである」というような歴史的・伝説的な言説が用いられる場合のあることはすでに指摘されている。⁽⁴⁾事例が示すように、増間話を例外でない。

事例2では、話者は「真田」という姓を証拠として、増間を落人の里と分析している。このとき話者は「昔からよくいった」ことを「事実ある」とされていることとつきあわせ、そこから「きっと利口だつたんだよ」「系統のいい人間が残つていいはずなんだよ」という解釈を引き出している。

現在の安房郡のフィールドにおいてこれらは特殊な事例ではなく、むしろ現在の増間話は、落人という分析をもつて話者によつて解釈され話される場合が多数であつて、「話者が増間話を分析し、解釈した言説」が、増間話を構成する欠くべからざる要素となつてゐる。

事例2の話者は落人の話に続けて「ワカメのミチ引き」「蟹の禪」

「増間島の由来」を連続して話し、その話末で

ていうことはねえ、そのくらい頓智がよくてねえ、頭がよくつて、そういう人がいたんだよね。⁽⁵⁾

と結論づけている。増間の人は利口である、頓智がよい、という言説にはさまれた「愚か村話」は「知恵者が愚か者をよそおつた話」へ読み換えられる。ここでは「話者の解釈」が、話と分かつがたく

重要な意味を持つて存在している。落人という解釈が介在することによって、話者は増間話を、「増間の人をおとしめる笑話」ではなく、「地域の歴史を物語る話」として話すことができるものである。

これら、現在の安房郡の話者たちが増間話を歴史的・伝説的に分析して解釈している言説は、当地で名のある歴史家・郷土史家の言説を引用している場合が多い。それら言説は日々の生活の中、例えば市町村広報や新聞の地方面のコラムとして、また観光整備や郷土学習の一環として、話者たちの視野へ入つてくる。話者たちはそれら言説を攝取し、取捨選択して各々の解釈や見解を育て上げている。房総をフィールドとする歴史家や安房郡の郷土史家たちの増間話をめぐる言説が、主に印刷メディアでもてはやされるという状況が、一九七〇年代を中心としてあつた。この一九七〇年代を一つの境として、「落人の伝説を背景とした、知恵者が愚か者をよそおつた話」という解釈で増間話を話す話者が多数を占めていく。この転換を推し進めた歴史家・郷土史家たちの活動を論じる前に、転換以前に増間話がおかれていた状況を確認しておきたい。

二 「この誤った風説が大正から昭和まで残されていて

金森美代子・川端豊彦『房総の昔話』(三弥井書店、昭和五十五年)の安房郡三芳村旧瀧田村における調査の解説に次の記述がある。

瀧田村の北端にあるのが「増間話」で有名な増間であり、外郭との交渉はほとんどなく村内結婚が多かったと言われているところである。「愚か村話」の該当地ということで、最初は多くの昔話を期待していたのだが、該当地ゆえに大変困難な調査になってしまった。増間の人は豊臣方の落人が世間を欺くために「愚か村」を装い、その話が語り継がれていることと誇りを持つておられるが、他地域において現在も語り継がれていることは大変な憤りを感じている。また、近くに住む人々は増間の人々に遠慮し、「増間話」はおろか他の昔話を語ることを拒む状況であった。

昔話を語る機会は、夜子供を寝かしつけるとき、イロリ端で

(p.13)

タキ木を燃しつけながら当たっているとき、雨降りで外に出られないとき、針仕事をしている母の傍で話を聞くときなどである。語る場所はイロリ端が多いようである。語る季節は冬に多いが、葬式の日には語つてはならないといわれている。最近では様々な事情があり、「増間話」を語つてはならないという傾向にある。

(p.255)

金森・川端らの調査が行なわれたのは昭和四八年のことである。増間話をめぐる空気の、特に増間の内部と外部の意識格差は、現在とはまるで別の地域の事情を聞いているかのようである。⁽⁷⁾ まずはこのよう、かつての増間話がおかれていた状況を、戦前の新聞記事を中心確認したい。

増間話が相次いで新聞記事に取り上げられるという状況が、昭和の初年にあつた。昭和七年七月、東京日日新聞の紙上で、「夏の話題」およそ滑稽な増間馬鹿、逢島山を探し求めて」として、増間話二話が紹介された。翌年の昭和八年、館山市内発行、安房郡内発行の地方紙、日刊房州に「増間の馬鹿の話」と題して、増間話の連載が始まった(第三回より「ユウモラスな増間話」と改題)。この事情については後述する)。増間話が民俗学研究者により報告されるのは、昭和十四年「郷土研究」十二年五号に掲載された押尾寿「増間の馬鹿話(安房)」を端緒とする。これら記事はそれより早く、増間話の内容を紹介するものとしては活字となつた最初のものといえる。⁽⁸⁾ 東京日日新聞の記事の冒頭を、少々長いが引用する。

およそ滑稽な増間馬鹿 逢島山を探し求めて

房州瀧田村といへば西も東も山また山の邊鄙山間の村、酒屋へ三里、豆腐屋へ二里に文字通りのところ、いひかへれば武陵桃源境、村の中を清流がせん／＼と流れて緑濃きあたり河鹿の玲瓏たる鳴き聲が聞かれる、まさしく仙境だ。その瀧田村の中でも特に交通の不便な一部は仙境中の仙境で壯年者の中にも東京を一度も見ないといふものがざらにあり甚だしいのは僅三、四里歩けば大海原が見られるといふにまだその海さへ見たことがない人達が多いと聞いてはたゞ呆然たらざるを得ない。兎に角さうした俗世間と凡そ縁遠いところだけに村民の間には世間話の種となるような飄逸滑稽な話題が澤山ころがつてゐる、

それを「増間馬鹿の話」といふ、こゝにその一つ二つを紹介に及ぼう……

(傍線部は見出し)

記事には「西も東も山また山の邊鄙山間の村」「壯年者の中にも東京を一度も見ないといふものがざら」「甚だしいのは僅三、四里歩けば大海原が見られるといふのにまだその海さへ見たことがない人達が多い」等の表現が用いられ、明らかに増間の者を揶揄する意図を持つて構成されている。これはこの記事のみに限られたことではなく、翌年の日刊房州の連載も同姿勢から企画、構成されている。昭和八年十月十六日付、連載第一回の冒頭部分を引用する。

文化の発達がクライマツクスに達したと云つてもよい今日、山間僻地の村とは云へ、學術に、産業に、立派な自治を敷いて、理智の光に照らされてゐる日本国民として耻づる所のない増間の人々に向かつて、過去の昔に語られた、増間の馬鹿の話を書かうと云ふのは僭越でもあり、禮を失する嫌ひがあるかも知れないが、過去に溯つて見ると、人々の間に傳へられた話は、どれもこれも、笑はれものと云つた話ばかりだ。私の書かうとするのは、その話であつて現在とは全然違つてゐるものだと云ふことを諒として頂きたい。もともと私がこれを書かうとしたのは、昔の増間村民のやうに、世間のイザコザを遠ざかつて、假令人にはなんと云はれようと、世間とは全然没交渉な、ありのまゝな、自然そのまゝの生活に、身を浸して、時間的にも空間

的にも屈託のない、幼稚と云へば幼稚、粗野と云へば粗野だが、大自然と神様との外には何事も考へずに暮して行つた純真な敬虔な生活ぶりに對して、涙ぐましい憧憬を禁じ得ないからです。

地元紙ということもあつてか、過去の事という和らげた表現を用いて慎重に書かれているが、その表現からはやはり増間に對する揶揄の感情がうかがえる。戦前の増間話を包んでいたのが、こうした「増間の人をおとしめる笑話」の空氣であつたことが、同紙への読者投稿の記事からも裏付けられる。

この連載に対して、増間の青年が行なつた抗議投稿が十九日の同紙に掲載されている。だがこの抗議も記者の筆により「おらが仙郷をたたえで」というおどけた題をつけられ、同日の紙面には読者の投稿した「増間の馬鹿の話」が掲載されている。

結局のところ、新聞はこの抗議を真面目に受け取らず、抗議は連載タイトルを「ユウモラスな増間話」に改題させただけに止まり、増間話をめぐる情勢にはなんの変化もなかつた。

こうした「増間の人をおとしめる笑話」の空氣は別の言説も生んでいた。房日新聞の昭和五十三年十月十七日の記事「南房総の伝説と名所・旧跡をたずねて」で、増間出身の郷土史家、安田高次は、当時の状況を次のように著している。

増間という所を全く知らない一般の者には、増間は地理的に房州の中央部であるし、恐らく昔は猪や鹿、狐狸のすむうつ蒼

と繁る山深い部落で他村との交際もなく、血族結婚で低能な馬鹿者が住んでいたであろうくらいに思つて軽べつするような言葉のほか全く認識がなかつた。この誤った風説が大正から昭和まで残されていて、ついに瀧田小学校において教育上ゆきしき問題であるとして抹消することに決して、「増間の馬鹿」のはなしは瀧田国民学校当時に禁句となつた。

ここでは、増間話の発生は、「血族結婚で低能な馬鹿者が住んでいた」という、医学的・遺伝学的な言説を用いて解釈されている。

この言説が広く、さらに戦後まで通用していた。そのことは、後年、前文の如くこの言説を言下に切り捨てている安田自身が、昭和三十七年の『増間の話』第一輯において

増間の馬鹿の逸話の数々は（中略）鎖国政策の結果、近親結婚の弊もあつたこと、思われるし、馬鹿の逸話は現実性をもつて他村の人々に受け取られたようにも考えられる。

と記さねばならなかつたことからも察することができる。⁽⁹⁾

「身体」や「血統」によつて増間の住民を囮いこむ言説は、増間話を「教育上ゆきしき問題であるとして抹消することに決」するに

十分な問題を抱えている。さらにこの解釈は、増間話を口に出し難い話とするのにも十分分であった。先に示した『房総の昔話』の話者は、明治二十年代、三十年代生れの世代である。同書の調査当時の、

「増間話語るまじ」の氣運は、この言説と、国民学校により禁止された話であるとの意識が一因となつてゐるといえるだらう。このような状況にあつても、一方で増間の住民を賢い人たちといい、落人という分析をもつて増間話を解釈する言説も存在していた。押尾孝は「郷土研究」掲載論文に増間を里見の落人ともいう、といふ報告をしているし、先に引いた昭和七年七月の東京日日新聞「夏の話題」は、話末に次のような談話を載せている。

ところが瀧田村の出身で縣會議員を永くつとめ副議長まで推されたことのある現房郡畜牛畜産組合長田村門次郎氏は、

増間馬鹿の話はよく笑ひ話にされるようだが、實際は増間の人たちは非常に利巧なんだ、なぜかつて他人より一錢でも余計自分が取つてゐないから不自然に思はせぬところ、また他村の島を自分の村のものだなんていつて仕舞ふところはちよつと眞似が出来ないことさ。昔増間は交通が不便なところだつたが學問は盛んだつたさうだからさういふ豪い人がゐたのさ

さういわれて見ればなるほど増間の馬鹿と笑つたほうがよっぽど馬鹿かも知れない。

だが昭和の初めにおいて、これら増間話を落人で解釈し、増間の者を知恵者であるとする、現在において多數を占めている言説は、少数者の唱える異説に過ぎなかつたことに変わりはなかつた。⁽¹⁰⁾

三 「今、新聞出たら笑い者になる」なんてそういう時代ではねえんだよ」

増間話は「文化の遅れた山間の増間の者がひきおこす愚行を笑う笑話」から「落人の伝説を背景とした、知恵者が愚かを装う笑話」へと、積極的に読み換えられていく。その過程においては、地域に居住し、主に地域の事象を研究している、地域と関わりの深い半趣味的な研究者、「歴史家」や「郷土史家」と呼ばれる研究者たちの活動が大きく作用していると考えられる。彼らは歴史・民俗事象の、地域における権威者（オーソリティ）と目されており、その言説は信頼に足るものとして話者たちに受け入れられている。

増間話を論じた歴史家・郷土史家は何人かいるが、その代表として、安田高次の存在を挙げることができる。⁽¹¹⁾

安田は明治四十三年（一九一〇）に増間（当時は瀧田村増間）にて、安田高次の存在を挙げができる。生まれ、同地で育った。戦中は満州に赴き、戦後、千葉県の教育事務職に就いて館山市に居を移したが、県の民俗調査に関わって『増間の話』を編んで以来、増間話について精力的に研究活動を行なってきた郷土史家である。増間に最も近く、影響も大きかった安田の活動を、本人の談話資料から見ていくことにする。⁽¹²⁾

昭和八年の「増間の馬鹿の話」の連載に対し、増間の青年を代表して抗議投稿を行なったのも安田である（この抗議は眞面目に受け取られなかつたことは、先に述べた通りである）。安田が増間話を

めぐつて本格的に活動し始めるのは、昭和三十七年に増間で行なわれた、千葉県緊急民俗調査の予備調査を契機としている。この前後の事情を安田は次のように述べている。

【安田高次の談話】 増間の民俗調査

それで県で慌てて（民俗調査）やつたっていうのはね、東大の、そんとき講師でしたよ、有名なね、東大文学部の講師で、（中略）、全国のね、オビシヤ、オビシヤの研究してんです。んでね、県で調べたら、オビシヤが、千葉県に来て調べたら、増間の御神的おまことつてのがあるっていうことがわかつて、（中略）、その大学の先生がね、増間の御神的みてね、

「こんな規則正しい、古来から伝わつてる御神的つてのは、他に無い。日本一だ」

つて県に報告したんだ。いやそりや、日本一、そんでね、

「ハア、こりや文化財に指定しなくちやなんねえ」つていわれつちやつて、県が慌てちやつた。だつて大学の先生に言われたんだから。そんでもつて急遽、調査やるようになつた。文部省に交渉したら、文部省がね、補助金、初めて補助金出した。そんでもね、千葉県とどつか山ん中の県と二件（調査を）やつた。千葉県、補助金でね、一箇所で調査する。初めて。

日枝神社の御神的神事が注目され、行政による民俗調査が増間に予定された。この予備資料の作成を三芳村教育委員会より依頼され

た安田は昭和三十七年、増間住の石野吉雄、川名徳次らと『増間の話』第一輯を編んだ。この中で安田は、増間は真田一族の落ち武者であり、増間話は知恵者の創造による、という歴史的・伝説的な

言説を用いて増間話を解釈し、旧家・真田家藏の古文書の内容を証拠として紹介している。この『増間の話』第一輯は、翌年の第二輯とあわせて、増間地区の全戸に配布されている。

予備調査は九月、文化財保護委員の田原久技官、歴史学の篠丸頼彦を中心とした専門委員と、委嘱を受けた調査員が民家に分宿し、民俗語彙・年中行事・人生儀礼の聞き取り、建築様式の確認、古文書の鑑定を行なった。その成果は「千葉県文化財調査報告書」三十

九（千葉県教育委員会、昭和三十九年）に、篠丸頼彦他「三芳村増間の民俗」としてまとめられている。この際、古文書調査の一環として、増間の村長／区長が代々管理していた「開けずの箪笥」が開かれ、その中から、増間村の文書と共に、明治五年作成の壬申戸籍の写しが見つかった。これにより安田の活動は大きく前進する。

【増間にはそういうあれがない】
「増間にはそういうあれがない」っていうんだよ。
「血族結婚があつたんじゃないか」
先生がね、

泊つたんです。一泊二日でね、やつたんですが、その時に篠丸つて、これね、戸籍に拠つて、全部調べたです。そうしたらね、血族結婚っていうのは、無いです。法律ではいとこの結婚が四組あるつて。そのほかね、まあ直系卑属ね、尊属ね、だからその、直系、直系尊属卑属の、同士の、結婚は無い。（中略）篠丸先生が、だから歴史で調べて、

当時、増間話に「血族結婚で低能な馬鹿者が住んでいたであろう」という、医学的・遺伝学的な言説が附加され、通用していたことは先に述べた。その風聞が壬申戸籍という史料の裏付けをもって否定されたのである。篠丸先生という「学者」が、「公の」調査で否定したということも、以降の安田の増間話に関する活動を支える基盤の一つとして機能していく。

この調査以来、郡県の教育委員会に紹介された学生が毎年、増間に民俗調査のため訪れるようになつた。増間を取り巻く環境は、県の調査以来まさに一変したといえる。

【安田高次の談話2 増間の民俗調査】
「なぜこれ（壬申戸籍のコピー）二部取つてね、篠丸先生が調べたかっていうとね、増間はね、バカバカっていうとね、バカ話があるけど、これはね、ことによるとね、『血族結婚でバカがあつたんじゃないか』っていう疑問があつたです。それでね、これは名主のうちにね、文部省の田原久つて技官が来てね、これは国の補助をするんですから、一人で名主のうちに

【安田高次の談話3 増間の民俗調査ブーム】
「それまでわたしはもう何回案内したかわかんねえです。大学生をね。卒論で来つでしょ。そんでね、増間の人つてのは正直

だからね、今と違つて昔ね。ほんでハアもう畠におつてもね、わかるんですよ。「オーオー」と声かけるとね、来るんですよ。話すとね、毎年繰り返しから、最後には増間の人もね、

「去年話したことをまた聞きに来た」でいうんですよ。でね、「去年来た人に聞けばわかんじやねえですか」っていうわけ。

「いやあ、それはこれこれこういうわけで違うんだ」と。「去年卒業した学生と、今年のとまた違うんだから、あの、去年は去年の学生で、今年は今年の学生で、また、増間の民話つづつたって違う話がいっぱいあんだから、民話ばかりでなくてね、いろんな、その、行事を調べに来るんで、協力してもらいたい」って。

「他に無い。日本一だ」と、東大の先生に民俗文化財に推された御神的神事、全戸に配布された『増間の話』、毎年大学生が卒論で来ることなどがあいまつて、増間における「増間への認識」が、肯定的なものへ転換したと考えることができる。そのときに全戸に配布された『増間の話』、つまり安田の解釈が信頼に足るものとして引用され、スタンダードな説明の言説の位置を獲得したといえる。さらに「去年話したことをまた聞きに来る」というような状況が、肯定的に改められた認識を強く固定した。増間にとつて民俗調査とは、毎年繰り返される「語る嘗み」を通じて、郷土である増間を肯定的に認識していく過程であった。安房郡の増間話観は、この時期の増間においてまず大きく転換していった。

増間においてもこの転換は急激であった。昭和四十三年、明治百年記念事業として、増間島と安田が中心となつて、富浦町の増間島に由来記を彫った石盤を設置するというイベントが催された。この行事に関して、安田が興味深いエピソードを述べている。

【安田高次の談話⁴ 増間島由来記 記念式典¹】

増間島のことはね、いろいろ、書いてありますがね、こいつが残つてますよ。あの、増間島へね、「増間島の由来」つていのをね、漢文に、なおしてね、岩盤に貼りつけてあるです。（中略）その時、増間のね、古老はみんな参加したですよ。増間はそん時六十軒くらいあつたですがね、全部の人から出てもらつたですよ。全部の人から出でもらってね、あの、岩盤に貼りつけたんですよ。

【安田高次の談話⁵ 増間島由来記 記念式典²】

「こういう新聞に出されたら大変だ」つて人間多くてね、増間の全部のうちから一人ずつ出たですから、いろんな人間がおつてね。

「今、こういうことはね、『増間のバカ』なんて新聞に出たら笑い者になるからね、新聞に絶対出さないでくれ」

つていうんだ。ちょうどね、新聞記者がね、文化の日でそつちこつち行つてね、それに（国の）首脳部が県のほう来たから、表彰なんかもあるしね、知らなかつた。だからね、新聞出さないでよかつたけどね。増間にはそういう昔からの人人がおつてね、

もうね、増間バカなんてみんな忘れちゃっておつてね、

「今、新聞出たら笑い者になる」

なんて、そういう時代ではねえんだよ。

して、様々な位相の出版メディアで取り上げられていった。
いくつか例を挙げてみたい。

安田を中心とする増間の壮年層・老年層は、増間話の「伝説所在地」である増間島を「明治百年記念事業」として取り上げ、伝説を由来記の形で残そうとしているのに対し、増間の古老といわれる年齢層では依然、増間話に対し

「増間のバカ」なんて新聞に出たら笑い者になる」

「新聞に絶対出さないでくれ」

という認識を持っていた。増間における増間話觀がこの時期に大きく転換し、旧来の増間話觀をもつた話者と、新しい増間話觀をもつた話者が入り混じっていたことがうかがえる。

四 「それらは一話一話貴重な民俗資料である」

一九七〇年代、ディスカバー・ジャパンの標語の下に「民話ブーム」と呼ばれる時期があった。失われた故郷を懷古する道具立てとして「民話」や「民俗」が注目を集め、ふるさと・民話・伝説等の言葉を冠した出版の量が増大した。⁽¹³⁾ そこでは他の出版物との個性化を図るために地域性が重視され、「地域特有の民話」が特に注目された。その際、歴史家・郷土史家の言説が、信用に足る説明として引用されていく。増間話もそのような「地域特有の民話」の一つと

増間の馬鹿 フエリィ・ボートが着く金谷の埠頭に馬鹿伝説の碑が立っているし、地元一帯にはいろいろな口伝えが残っている(詳しくは巻末の文献を参照されたい)。これは保身上馬鹿を装うため、自ら流布したものであり、落人の悲しい宿命を短絡に物語るものであるが、これだけの話を創作することは馬鹿では不可能である。

(千葉県山岳連盟編『房総の山』千秋社、昭和四十八年)

『房総の山』は登山・ハイキングのガイドとして企画された出版物である。ここでは観光という視点から増間話を照射し、地域を特別なものと色づける演出として利用し、それが信頼に足る説であることを「巻末の文献」によつて示している。歴史家・郷土史家からの引用・コメントは「生ける『巻末の文献』」として記載内容を補助し、深めるものとして機能していく。朝日新聞千葉版に掲載された短期連載記事「三芳村増間に見る過疎有情」の第五回(昭和五十六年一月六日)は、増間の愚か村話と落人伝承を取り上げている。そこでは安田のコメントが次のように記事にされている。

増間出身で現在、館山市に住む郷土史家、安田高次(七一)は、「帰農していた人たちが秀次に従つて参戦、小牧・長久手

の戦（一五八四年）などのあと、故郷に戻ったのではないか」と「お墨付」の由来を考えている。

歴史家・郷土史家の解釈はこのような形で広範な読者に攝取され、定説としての位置を固めていく。落人の伝承によつて増間話を歴史的・伝説的に解釈した肯定的な増間話観も、このような経過をもつて話者たちの視野へと入つていき、話者一人一人の解釈や見解としで顕在化していくたと考えられる。そして市町村史や行政の広報出版物といつた、公的な背景を持つたメディアに登場することができる。解釈の定着を示す一つの指針とすることができるであろう。昭和五十九年発行の『三芳村史』には、増間話が次のように記述されている。

山間集落で、落人伝説があり、増間昔話がいくつか語り継がれている。自給自足の名残りの「コンニヤク・ムギ・茶」など栽培され、茅葺き屋もあり若干の茅組構制度が残っている。

（序説 自然と人文 p.27）

(2)「増間の昔話」について この昔話は増間の石野吉雄（故人）川名徳治（故人）安田高次（館山市在住）の三氏によって編集印刷されたもので、土地の古老達の話を元にして自分達の記憶を想いおこして苦心して書き綴つたものである。

（中略）それらは一話一話貴重な民俗資料である。

〔第4章第8節 郷土の文化遺産〕 p.1017)

ここでは増間話の題名を紹介するにとどまり、内容までは掲載していないが、五年後の平成2年に出された、三芳村発行の郷土学習資料『ふるさと探訪三芳村』では、「増間の話」から引用されて、児童向けにリライトされた「海へ流れた増間島」が掲載されている。「最近では様々な事情があり、「増間話」を語つてはならない」という傾向にあつた増間が、その様相を一変させている。変化は増間にとどまるものではない。富浦町・大房岬の増間島の前には環境庁と千葉県が設置した案内板が設置しており、増間島の由来を伝えている。増間話は「語つてはならない」話ではなく、「地域特有の民話」「郷土の文化遺産」として認知されるに至つている。

五 現在のフィールドの把握に向けて

増間話の変遷は、歴史家・郷土史家の言説の展開の影響を強く受けている。従来の「口承文芸研究」は、「原型」や「古層」の考察に重きを置き、こうした話者の解釈や見解を無視、あるいは排除してきた。それは専ら「口承」の世界に完結した過去とのみ向き合う姿勢であった。かつての「よい伝承者像」から見れば、現在の増間話の話者たちのような「解釈する話者」たちは、伝承の衰退の実例ということになるだろう。¹⁴⁾

だが実際のフィールドでは、話は「口承」の世界に完結した過去にのみではなく、現在の中に生きているのである。安房郡の話者たちの、自らを歴史の堆積の中に位置づけたい願望が、増間話と落人

の伝承を結びつける解釈を支えている。⁽¹⁵⁾ 話者たちが日々の生活の中で摂取した言説を消化し、取捨選択して育て上げた一人一人の解釈や見解が重要な意味を持つて「口承」の場に存在している。この、現在と関わって「口承」について発言しあう當みは、民俗学のフィールドが常に抱えている「伝承」の一つのありようといえるだろう。

近年、「口承」の現在と向き合っていこうとする研究が積み重ね始められている。⁽¹⁶⁾ 本稿も「口承」の現在と向き合うための一つの試みとして、位置づけていきたい。⁽¹⁷⁾

チ（硬い葉脈の部分）を引いて食べる」と教えられるが、ミチの意味がわからず、縄で引いて持ち帰り、食べられなくしてしまったという笑話。「蟹の禪」は、閑敬吾『日本昔話大成』三一五番に同題で掲載されている笑話。蟹の食い方を知らない男が、蟹は禪を取つて食えと教わり、禪を脱ぐ。「増間島の由来」は安房郡富浦町の大房岬にある増間島の地名由来。大水で増間の水神様を祀った岩が流された。増間の人が探しに来て増間島を見つけ、水神様の岩だと言って持ち帰ろうとしたが、動かないのであきらめてそこに水神様を祀つた。いずれも安房郡でよく聞くことのできる増間話である。

注 （6）注3に同じ。

（7）「増間の馬鹿」という語は天保三年（一八三一）、夷隅の田丸建良が著した紀行、『房総志料統編』が初出となる（『房総叢書』地誌篇に所収）。この記事では増間の馬鹿という言い習わしを紹介し、その内容には触れていない。藤沢衛彦は『日本伝説安房の巻』（日本伝説叢書刊行会、大正八年）に「増間の馬鹿」の項目を立て、『房総志料統編』の記事を紹介している。

（8）東京日日新聞「夏の話題」および、日刊房州「増間の馬鹿の話（ユウモラスな増間話）」は、安田高次氏所蔵のスクランプを御提供頂いた。この時期、地方新聞で郷土史や民俗文化を取り上げるのが一つの流行であった（奥南新報「村の話」の連載は昭和四年）。後半触れる「民話ブーム」など、一連の「学問の流行」の動きについても注目していく必要があるだろう。

（9）このような、科学的妥当性に欠ける医学的・遺伝学的な語を

（1）本稿は、平成九年から十一年にかけて、國學院大學説話研究会が千葉県安房郡富浦町において行つたフィールドワークに基づく。論者もその一員として調査の全日程に参加した。調査の成果は資料集として公表の予定である。

（2）平成十年三月、千葉県安房郡富浦町手取での聞き取り。男性・大正三年生・農業。

（3）平成十年三月、千葉県安房郡富浦町居倉での聞き取り。男性・昭和三年生・農業及び会社経営。

（4）著名な愚か村話「佐治谷話」には「知れえでもつてわざつとダラズになる」の決まり文句がある。起源を落人とする愚か村話も佐治谷の他、柄木の「栗山話」、熊本の「五箇庄話」など数多い。

（5）「ワカメのミチ引き」は、増間の人々が浜の人々に「ワカメはミ

用いて「身体」や「血統」によって特定集団を閉いこむ言説は、口頭伝承の暗部である「被差別部落の発生を語る話」「病・障害の血統を語る話」等にも立ちあらわれてくる。

(10) 事前発表の際、「増間話は落人の伝承を含めた形で発生し、伝承されてきたのではないか」とのご指摘を頂いた。しかし本稿の立場は愚か村話の伝承と落人の伝承の先後関係を考察するものではなく、以前には増間の住人を愚かと見なす解釈が優勢であり、年代と共に増間の住民を落人の末裔で賢いと見なす解釈が優勢となつていったという、言説の変遷を考察するものである。従って本稿では伝承の発生の先後関係については、論及しない。

(11) 安田高次の他に、房総民俗会の高橋在久、平野馨の活動も増間話観の転換に大きく影響しているが、紙幅の関係上触れられない。また、本稿で論じたのは安田の活動の影響にとどまり、主張の内容や、郷土史家という存在の地域での在りようと、研究者の存在や民俗調査というイベントが地域の言説に与えた影響などには具体的に踏み込んで論じることが出来なかつた。この点について、別に稿を立てて論じたい。

(12) 安田高次の談話は平成一〇年から十一年にかけて数度に渡り、論者がインタービュアーとなつて聞き取らせて頂いた。

(13) 伝説集を対象とした斎藤純の調査によると、ピーターは昭和五十年から五十五年。斎藤純「伝説集の出版状況について」(「世間話研究」五号)

話研究会、平成六年)

(14) 「一般に望ましい伝承者は、その土地で生まれ育った高齢者でしかも問題を的確にとらえ、自分の解釈を混じえずに答えて

くれる人といえよう。」松崎憲二「民俗の調査と記録」(福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文館、昭和六十一年)などが「従来の口承文芸研究」の代表的な見解だといえよう。

(15) 野村典彦「史話」「世間話研究」八号 世間話研究会、平成十年)、同「鉄道、あるいは旧道」(「口承文芸研究」二十三号 日本口承文芸学会、平成十二年) 参照。

(16) 「桃太郎神社の誕生」にむけて(一)(「世間話研究」四号 世間話研究会、平成五年)をはじめとする観光地の伝説を論じた斎藤純の諸論攷、印刷メディアと話の伝承の様相を論じた小堀光夫の「話の伝承」の様相」(「世間話研究」四号) 同「大関、白川徳右衛門の話」(「昔話―研究と資料」二十二号 三弥井書店、平成六年)、「被調査者からの情報の発信」を軸に、オリエンタリズム批判も視野に入れて論じた、川森博司「現地の人々の声」(「比較日本文化研究」四号 待兼山比較日本文化研究会、平成九年)などが挙げられる。

(17) 本稿は、増間話をめぐる郷土史家たちの言説と話者たちの解釈の変遷を事例として、「口承」の現在と向き合うことを狙いとしている。すべて愚か村話は「郷土の文化遺産」のような肯定的な評価を獲得して変容していくであろう、というような乱暴な一般則を導き出そうとするものではない。

(いいくら・よしゆき／國學院大學大學院)